

一般社団法人日本社会福祉学会第64回 秋季大会 報告

日本社会福祉学会 第64回秋季大会 実行委員長 岡村 正幸（佛教大学）

去る9月10・11日、本学では34年ぶりとなる日本社会福祉学会第64回秋季大会を開催することが出来ました。2日間、全国各地から、また韓国や中国からも多くの方々にご参加いただきましたことに感謝申し上げます。

当初、秋の京都というシーズンのもつ人の賑わいのなかでの開催日時、宿泊確保の問題や、大規模な校地リニューアルが続いているなかで、大会を引き受け、運営することが出来るのか、かなり心配をしました。取りあえず学部と福祉教育開発センター内に実行委員会を立ち上げると共に、大会運営委員長である山縣文治先生や、原田正樹先生をはじめとする運営委員会の先生方とご相談をさせていただきながら、多くの方のご協力により、スタッフを含めるとほぼ1,000名ほどの参加者をお迎えすることができました。

大会そのものの位置づけや、その中での大会校企画事業については、学内での議論をもとに、運営委員会、理事会と相談し、本学としての社会福祉に対する考え方を出来るだけ反映させることを試み、大会テーマを「社会福祉が育む『共生の創造』」としました。社会福祉の歴史にしっかりと足を踏まえ、後期近代の複雑な社会的混乱の広がりの中、「多様な生きる」を支え、かつ発展させていく社会的役割を社会福祉が持っているとの時代認識に立っています。したがって、大会校企画シンポジウムについては大会テーマをもとに生田武志、佐藤洋作、加藤博史、鈴木勉各氏をお迎えし本学の池本美和子氏をコーディネーターに野宿者、ひきこもり、困窮者、障害のある人などをめぐる多様な活動、考え方をご報告いただき400名を超える参加者と共に貴重な今日的論点について議論を深めることが出来たものと考えています。また若手研究者のためのワークショップでは社会福祉研究における歴史の継承を考え、川上昌子、須藤八千代各先生をお招きし研究者の時代的役割として研究方法に関わり「研究者の自己形成史」を語ってもらうという試みを行いました。かなりの反響があり、今後継承してもいい企画のようにも感じています。

また、中国や韓国の先生方にもご協力をいただいた学会企画の国際学術シンポジウムや留学生のためのワークショップ、さらに特定課題セッション、また各分科会、ポスターセッション等についても多くの方のご報告、ご参加をいただきました。

こうして大会をお引き受けしてつくづく感じるのは、やはり引き受けた大学の歴史や教育の理念、さらに地域の歴史といったことによってその大学らしさが出ざるを得ないし、またそうしたもののなかのなかでも感じています。大会校企画などもその一つですが、例えば情報交換会での歓迎セレモニー“紫野へいこう”での地域高齢者グループ「パープルフレンズ」と学生による「出迎えの歌」も本学事業である地域フィールドワークをもとにしており平和や正義、共生といった教育理念が生きていたのではないかと思います。

また、本学独自の試みとして、運営の効率化や共通化のため、かなりの時間を割いて80ページにのぼる「大会運営マニュアル」を作成し大会事務局と実行委員会で共有しました。

今後に引き継げる面もあり、なかなかの力作だと自負しているのですが、それでも限界があり、緊急な判断や当日対応が必要になることも多く、学会員や開催大学の教員や事務方、さらに学生達の一致した協力なしには大会の開催、運営は困難であったと思います。

こうした中、見えてきた幾つかの課題もあります。

そのひとつは大会の開催、運営に関わる問題です。やはりひとつの大学が学内の教員により大学内の施設を利用しながらこの規模の大会開催を引き受け、かつ運営するというのはなかなか大変なことだと改めて感じています。その点で、外部委託である現在のヘルプデスクとの業務分担はかなり重要な課題と思います。今でもその支援抜きで実施することは出来ないとと思いますが今後その形態や役割分担等についての一層の検証が必要かと思います。

ふたつ目には開催時期の問題です。現在では学会総会を含む春季大会が別途開催されていますが、秋季大会は従来の10月中旬開催がなかなか難しく9月から12月の間で設定されています。それだけではありませんが、これが参加者の増減にも繋がっているのではないかと思います。今回も、京都ということや大学の事情でこの時期になってしまいました。宿舎の確保は料金と共にかかなり難しかったと思います。

さらに、財務処理の問題です。現在は随分とヘルプデスクによって助けられています、それでも開催校にとっては大きな負担になりますし、さまざまな業者発注やアルバイトの設定など多くの時間と手間がかかります。

今回、大会校としてできるだけの取り組みをいたしたつもりですが、それでも様々な条件のなか行き届かなかったことも多々あったものと受け止めております。しかし、岩崎会長をはじめ理事会や運営委員会の皆様、大会開催、運営にご協力いただいたシンポジストや全体統括者、報告者をはじめとする先生方、また多くの会員の方々、さらに当日を含め運営にさまざまなサポートをしていただいた大会ヘルプデスク皆様のご協力によってなんとか無事終了することが出来たものと考えております。開催校としてスタッフ一同、心より感謝申し上げます。

次年度は首都大学東京で開催とのこと、より一層の研究的交流が深まり、社会福祉学の発展につながることを期待してご挨拶とさせていただきます。